

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

古代アンデス文明の性と死

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5272

Team Peru

古代アンデス文明の性と死

文 関雄二 [せき・ゆうじ 国立民族学博物館教授]



後背位での肛門性交を行う男女。この器は、
貴人墓の副葬品として出土することが多い。
モチェ中期(3~6世紀) 高20.8cm リマ、マフ
エル・ラルゴ・エレラ考古学博物館蔵
*制作時期は70~73頁全て同じ。

Photo: Museo Larco Lima - Peru



ルーの首都リマ市、独立の英雄 シモン・ボリーバルの名を冠した通りに面したラファエル・ラルコ・エレラ考古学博物館は、エロティック土器を集めた展示室があることで有名である。これが目当てとはいえず、来館者は、あらわな性器とまぐわいの姿に照れ隠しの笑みを見せる。大半の土器は、古代アンデス文明のモチエ、あるいはモチーカと呼ばれる文化の産物である。

南米アンデス文明は、今日のペルーやボリビアをまたぐ地域で成立した。この文明はインカ帝国の名で知られるが、その成立は15世紀後半から16世紀前半と比較的新しく、インカ以前の5000年にわたって古代文化が栄枯盛衰の過程を経たことが解明されつつある。モチエもその一つで、ペルー北海岸を中心に栄えたアンデス文明史上最初の国家であった。

アンデスというと万年雪を頂く山々ばかり思い浮かぶが、海岸沿いには、地球上唯一の低緯度砂漠も広がる。この砂漠を分断するように、アンデス山脈の西斜面を源とする河川が流れ、その流域は、過去、そして現在

に至るまで人々の生活の舞台を提供してきた。その複数の河川流域を束ねるような社会の動きが、西暦紀元1世紀頃、ペルー北海岸に現れ、最終的には南北600キロを影響下に置くモチエ国家が誕生し、8世紀近くまで栄えた。

モチエという名称は、その中核地が同

名の河川下流域にあったことに由来する。そこには、日干しレンガを積み上げたモチエ史上最大のピラミッド型建造物である太陽の神殿と月の神殿がそびえ立つ。モチエを世界的に有名にしているのは、その巨大な建造物やおびただしい量の金製品を副葬した墓の存在ばかりではない。

クリーム地に赤褐色の顔料で画像をリアルに描いた彩色土器や象形土器の見事さも理由の一つである。世界各地の博物館に収蔵されるモチエ土器の大半が出土地不明の盗掘品であるにもかかわらず、土器の画像分析に魅せられる研究者が後を絶たないのは、学問領域として独立できるほど膨大な量の画像データが存在するからである。

狩猟、漁労、機織り、儀礼、戦争など描写されるテーマは多様だが、ことに性描写のきわどさは以前から知られていた。誇張された性器、ノーマル・セックスからアナナル・セックス、フェラチオ、そしてマスターベーションなど性表現のオンパレードである。体位も正常位、後背位、騎乗位など表現は細かい。当然、研究者も、なぜそこまで性を描いたのかに関心を寄せてきた。古いところでは、文明初期からその存在が認められる頭蓋変形(乳児期より頭に板を当てて頭蓋の形を変える)に



捕虜をかたどった壺。モチエではエリート間の儀礼的戦闘が行われ、敗者は捕虜となり、供儀として捧げられた。裸にされて装飾品が外され、首に紐が巻かれている。高28.3cm
リマ、ラファエル・ラルコ・エレラ考古学博物館蔵
Photo: Museo Larco Lima - Perú



大特集

Shunga World Cup 2012

春画ワールドカップ

ラファエル・ラルコ・エレラ考古学博物館のエロティック土器の展示風景
創設者のラルコ・オイレは、私財を投じてアンデス文明研究に情熱を注いだ民間考古学者。Photo: PPS

よる心的外傷が誘発したモラル欠如の行為の表現であるとか、性の奥義を伝える「アンデスの「カーマ・ストラ」である」という説もあった。

冒頭で触れた博物館を建てたラファエル・ラルコ・オイレは、エロティック土器の図録集を出版する



など、このテーマを体系的

に捉えた初めての考古学者である。彼はエロティック土器を四つのカテゴリーに分類している。使用する際に口を触れざるをえない注口部に性器を象った、いわゆるユーモア土器、骸骨姿の人間が行うセックスや手淫の表現を通して性の過剰さを戒める道徳教示用の土器、避妊手段を伝える目的をもったアナルとフェラチオ土器、そして女性と超自然的存在との性交を表現した宗教的土器である。

この分類の是非はともかく、彼が指摘

した宗教的表現については、近年の研究でも焦点となっていない。スペイン人による征服後に記録されたインカ帝国での儀礼に注目し、モチェ時代にも同じような習慣があったと考えるある研究者は、南半球の乾季にあたる春分に、豊穣を祈願して行われた儀礼と関係するのが正常な性交であるとする。一方、雨季にあたる秋分に行われる儀礼は、非生産性と関わるアナ

ル・セックスやマスターベーションによって表されているとする、構造主義的解釈である。しかし、それならば豊穣を祈願する土器が多くなりそうだが、実際にはアブノーマルな性交を表した土器の方が多い点で、この解釈には無理がある。



巨大なペニスを勃起させる骸骨男の形の容器。しばしば死者は白く塗られることで、生者の赤褐色と対比される。高28・6cm Photo: Museo Larco Lima - Perú

その意味で、最近、ステイブ・ブルジェと

いう北米の考古学者が提示した解釈は最も説得力がある。まず彼示した解釈は最も説得力がある。まず彼は、私たちがポルノ土器とか、エロティック土器と呼んでいるものの大半がエリート階級の墓の副葬品として出土している点に注目し、死との関連を重視する。実際に一般の住居からこの種の土器が見つかるとはまずない。

死との関連性は絡み合う男女の周辺に配置された図像に注目するとよくわかる。性描写のまわりは、二色の帯や波紋様という、実

際の神殿で発見されるのと同じ絵柄で飾られ、ま

た墓の被葬者の口から発見されることが多い板状の金属製品や、墓から実際に出土するゴザや副葬品としての土器も、土器表面に描かれ、象形モチーフに組み込まれる。公的な葬送儀礼と性との関連していることは間違いなさそうだ。しかし実際の儀礼の忠実な描写ならば、



死者を表す骸骨男の性器を女性が握っている。胴部に階段紋様の神殿や副葬品の土器が描かれ、宗教性をおわせる。高22.5cm Photo: Museo Larco Lima - Perú

いろいろな性行為の意味はどこにあるのだらうか。ブルジェが見出したのは、ノーマルなヴァギナ・セックスを行う男性の特徴である。皺の寄った顔を持ち、牙をむき出しにした超自然的存在か、または儀礼的戦争に敗れて捕虜となったり、人身供儀の犠牲になった人物ばかりが女性と交わっているのである。

人身供儀の犠牲者である鼻を削がれた死者が女性の陰部を愛撫する。高18.7cm Photo: Museo Larco Lima - Perú

モチエ社会では、支配階級であるエリート間で儀礼的戦争が行われ、敗者は裸にされ、装飾品をはぎ取られ、首に縄を打たれることが壁画や土器の画像研究から知られ、また実際にそうした戦争捕虜を供犠に捧げ



た痕跡が発見されている。その儀礼的死を記憶するために、エリート戦士の肖像土器なども製作された。そうした儀礼の犠牲者が行うセックスの表現はノーマルなのである。

また、牙をむき出し、セックスに際しては身体から樹木が生えたりする超自然的存在は、一連の物語の主人公として、絵巻物のように土器に描写される。あたかも彼らが生きる特別な世界があるようだ。超自然的存在が活躍するその世界をブルジェは「死後の世界」であると考

えた。つまり、ブルジェによれば、モチエ人は、「生」「死」「死後の世界」という三段階で世界を捉えていたことになる。骸骨人間が、葬送儀礼の場から、超自然的存在が君臨する別な世界へと移動する画像が存在することからも、「死後の世界」と、その前段階の「死」が区別されていたことがわかる。

葬送儀礼をブルジェの三段階説にあてはめれば、それは生者の参加によって営まれる以上は「生」に属し、「死後の世界」への旅立ちを前にした死者を主人公とする点では「死」にも属している。中途半端で曖昧な時間、空間であり、

非日常的な儀礼や行為の場である。この非日常性が、モチエにおいては、アナル・セックス、フェラチオ、過大な性器といった、逸脱的な性の姿を取って土器に形象されたのである。

こうしてみると、モチエのエロティック土器とは、高貴な男性が死に、やがて「死後の世界」へと旅立ってゆく、その過程を表象したオブジェだということができよう。旅立ちに際して、捕虜となったエリート男性を犠牲に供すれば、死者は「死後の世界」にたどり着くことができ

た。盃にうけた犠牲者の血を、死者が象徴的に飲み干すことで旅立ちがなされたと考えられており、死者との儀礼的な性交が行なわれた可能性も指摘されている。ちなみに、「死後の世界」に君臨する超自然的存在とは、おそらく祖先を表現したもので

顔や胴体が動物をイメージさせる男女による肛門性交。高18.4cm
Photo: Museo Larco Lima - Peru



である。アンデスの信仰では、祖先が現世に豊穣をもたらすとされていたことが、スペイン人による征服の直後に確認されている。「死後の世界」のセックスがノーマルなのは、祖先が豊穣性（ノーマルな生殖行為）を有すれば、現世も豊穣性を有するという観念からくるのであろう。

モチエの土器の多様な性の表現には、実際の行為とその知識が前提にあったこととは否定しないが、現代人の感覚で、性的快感を求める面だけに注目しては、死生観との交錯を見失うことにならう。性は意外と複雑なものなのである。

側位で肛門性交する男女。円筒形の胴部を飾る帯状の紋様は、モチエの神殿装飾にしばしば見られる。女性の頭の下に見える枕は、実際に墓から出土するゴザを丸めたものであろう。シカゴ美術館蔵 Photo: PPS



〔右〕玉座に腰をかける貴人。右頁右の骸骨男と同様、巨根が注ぎ口になった容器。高20・3cm
Photo: Museo Larco Lima - Peru